

シックビルディングシンドロームとしての
ラドンによる室内空気汚染問題
Indoor Radon Air Pollution Problems in Terms of
the Sick Building Syndrome

池田 耕一
国立保健医療科学院建築衛生部
Koichi IKEDA
National Institute of Public Health

省エネルギーと一般室内環境における空気汚染いわゆるオイルショック以後の建築物における省エネルギー対策としての建物気密化により発生した新しいタイプの様々な空気汚染問題は、シックビルディングシンドローム(SBSあるいは、わが国ではシックハウス症候群、SHS)と呼ばれ、世界中で、大きな社会問題となっている。そしてSBSを起こす汚染物質の1つとして、1980年代の欧米において最も注目を浴びたのがラドンである。一例を示せば、1990年、カナダのトロントで行われたIAQ'90という室内空気環境に関する国際会議には、500編におよぶ論文が報告されたが、そのうちの1割弱の45編程度が、ラドン汚染に関するものであった。また、そのとき同時に行われた室内空気環境計測や空気汚染防止機器に関する展示会には、ラドン濃度計測機や汚染防止装置の多数の展示があっただけでなく、The Radon industry Review (日刊紙)や、The Radon Directory (年鑑)を発行している出版社(Radon Press社)が出展するなど、ラドン計測や汚染防止が充分、産業として成り立っていた。ところが、このようなSBSという意味でのラドン汚染の問題は、欧米において、その後何故か急速に問題とされることがなくなり、代わりに化学物質や微生物による汚染問題が注目を集めだした。それでもラドン汚染問題自体が解決したわけではない。室内空気汚染と言う意味では、その汚染原因が何であれ、基本的には同じ側面もあるので、ラドンによる室内空気汚染の調査研究から得られる知見は、わが国におけるシックハウスなどの室内浮遊空気汚染の諸問題を解決する上で、さまざまな有用な示唆を与えることができると考える。本講演では、ラドンによる室内空気汚染問題に関する研究成果について紹介する。